金栗（かなくり）四三（しそう）さんのマラソン人生

玉名市名誉市民「金栗四三」さんが2019年NHK大河ドラマ「いだてん」の主人公に決まって1年。この機会に、金栗さんのマラソン人生をおさらいしてみましょう。

金栗さんのマラソンの原点

金栗さんは1891（明治24）年、父が43歳の時に8人兄弟の7番目として春富（はるとみ）村（現和水町）に生まれました。

玉名北高等小学校（現南関町）入学後、往復12キロの山坂の道を毎日走って通学。これが金栗さんのマラソン人生の原点です。成績優秀で旧制玉名中学校（現玉名高校）へ進学すると寄宿舎に入って勉強に励み、週末は歩いたり走ったりして自宅へ戻り農作業を手伝う日々を送りました。中学でも優等生で、学費免除の特待生に選ばれるほど。意外にも中学では体操や剣道の時間が最も苦手で、運動会でも友人に頼んで代わりに走ってもらっていました。ところが東京高等師範学校進学後、校内競走で思わぬ好成績を収めたことから徒歩部に入り、才能を磨きます。そして、オリンピック国内予選会を世界新記録で優勝。日本初のオリンピック選手に選ばれました。

西暦	できごと	居住地
1891	春富村（現和水町）の金栗家に誕生	春富村 13歳
1897	春富村吉地尋常小学校入学	
1901	玉名北高等小学校入学（現南関町）	
1905	父病死、玉名中学校（現玉名高校）入学 寄宿舎（弥富村）で生活し週末春富村に帰宅	弥富村
1910	東京高等師範学校（現筑波大学）入学	東京 18歳
1911	オリンピック国内予選で世界記録達成	
1912	第5回オリンピックストックホルム大会出場	
1913	第1回陸上競技選手権大会で世界記録	
1914	東京高等師範卒業、研究科へ 小田村（現玉名市）池部家の養子となる話まとまり石貫村の春野スヤと結婚	
1915	第2回陸上競技選手権大会で世界記録 大日本体育協会功労賞	
1916	第6回オリンピックベルリン大会中止 神奈川師範学校赴任（以後教員生活）	
1917	高地トレーニング開始 日本初の駅伝、奠都（てんと）記念東海道五十三次駅伝競走を企画 大日本体育協会功労賞、富士登山マラソン競走	
1919	下関―東京間1200キロを20日間で走破 日光―東京間130キロを10時間で完走	
1920	第1回東京箱根間往復駅伝競走を企画	
1921	第7回オリンピック・アントワープ大会出場 オリンピック後ドイツで女子体育の振興に目覚める	東京 22歳
1922	東京府女子師範学校赴任、日本初女子テニス大会、第1回女子連合競技大会開催	
1923	日本初女子テニス大会開催	
1924	第1回女子連合競技大会開催	
1931	第8回オリンピック・パリ大会出場 樺太―東京間を20日間で走破 関東女子体育連盟結成	
1936	玉名へ帰り、九州一周走破、県内外でマラソン普及に奔走	小田村 40歳
1945	日本初のオリンピック誘致のため上京 女学校に勤めながらオリンピック準備	45歳
1946	玉名へ帰郷	
1947	熊本県体育会初代会長	小田村（現玉名市） 53歳
1948	第1回県民体育祭開催に尽力	
1949	東京箱根間往復駅伝競走復活	
1952	第1回金栗賞朝日マラソン（のちの福岡国際マラソン選手権大会）	
1953	熊本県初代教育委員長	
1955	第1回西部マラソン20キロ大会（佐世保市開催）※のちの金栗杯	
1957	熊日社会賞受賞、九州一周駅伝を企画	
	西日本文化賞受賞、ボストンマラソン日本監督	
	紫綬褒章受章	
	紫綬褒章受章を記念し熊日30キロ招待マラソン開催（のちの熊日30キロロードレース）、熊本県近代文化功労者表彰	
1958	朝日文化賞受賞	
1959	第11回西部マラソン30キロ大会玉名市開催（のちに金栗杯玉名30キロマラソン大会、金栗杯玉名ロードレース大会、金栗杯玉名ハーフマラソン大会と改称）	
1960	第15回国民体育祭、最終聖火ランナー	
1962	玉名市名誉市民（第1号）	
1964	第18回東京オリンピック開催、聖火リレーを玉名市役所前で見守る	玉名市上小田 71歳
1965	勲四等旭日小綬章受章	
1967	秋の園遊会に招待される	
	スウェーデンで55年目のゴール	
1969	玉名高校で金栗四三銅像除幕	
1972	熊本走ろう会初代名誉会長	
1983	11月13日永眠、金栗翁追悼玉名市民マラソン、玉名市名誉市民故金栗四三先生合同告別式、従五位銀杯下賜	92歳
1984	三加和町名誉町民、三加和町で第1回金栗四三翁マラソン大会開催（現和水町）	

日本初のオリンピック出場、そして消えた日本人走者に

1912（明治45）年7月の第5回オリンピックストックホルム大会は猛暑に見舞われ、マラソン選手68人中34人がリタイアする過酷なレースとなりました。金栗さんも日射病にかかり26・7キロ地点でコースをはずれ、林の中に消えてしまいました。そのため、金栗さんはスウェーデンで「消えた日本人走者」として語り続けられることに。この時金栗さんは、地元実業家のペトレ家で介抱され、そのまま宿舎に戻りました。

期待に反し、金栗さんは思うような結果を残せませんでした。敗因は長旅と宿舎の影響でコンディションが維持できず暑さにまいったこと、練習と経験不足、慣れない硬い舗装路面に足袋が破れヒザを痛めたことなど。翌朝の日記には、力量不足を認め、将来の雪辱を誓う力強い言葉が綴られています。

挫折をバネに、日本マラソン・スポーツの先駆けに

1914（大正3）年、22歳の時に親戚だった小田村の池部家の養子となる話がまとまり、春野スヤさんと結婚。次のオリンピックで雪辱を果たすため、その後も母と妻を玉名に残して東京で教壇に立ちながら後進育成、そして自らの走りに磨きをかけました。

オリンピック出場で世界の水準を目の当たりにした金栗さんは、世界で勝つためには日本でもスポーツを広めなければならないと決意。高地トレーニングや金栗足袋の改良などの専門的な取り組みはもちろん、スポーツの裾野を広げるために箱根駅伝などの駅伝大会を企画したり、女子体育の振興を目指します。

現役を退き玉名に帰ってからもマラソン普及に尽力、県体育界をリードしました。その功績を称えようと金栗さんを記念したマラソン大会がいくつも生まれ、中でも金栗杯玉名ハーフマラソン大会は今も有望選手の登竜門になっています。

ストックホルムからの招待、55年目のゴール

1967年にはストックホルムオリンピック委員会から招待され、若き日に果たせなかったゴールインを54年8カ月を経て達成。この記録は、世界で最も遅いマラソン記録として語られています。

25万キロを走り抜いた人生

晩年も各地のマラソン大会へ出かけては選手たちを激励し、自らスターターをつとめるなど、いつも温和な笑顔でレースを見守っていました。

「体力・気力・努力」の精神とともに、誰もがスポーツを楽しむことができる日本をつくることに生涯をかけた金栗さんは、1983（昭和58）年、92歳で永眠しました。

金栗さんの足跡をまとめたリーフレットを市役所・博物館で配布中！